

文章に表れているものの見方や考え方に、体験を関連付けて自分の考えをもつ指導の工夫

【松伏町教育委員会】

- 1 学校、学年、教科 中学校、第2学年、国語科
- 2 ねらい 「自分の考えをもたせる」指導の工夫
- 3 具体的な工夫・改善

(1) 単元を貫く言語活動の設定と生徒に学習の見通しを持たせる。

※本単元では、「登場人物『お父さん』の描写から人物をつかみ、「きずな物語」を創作する。」こと。

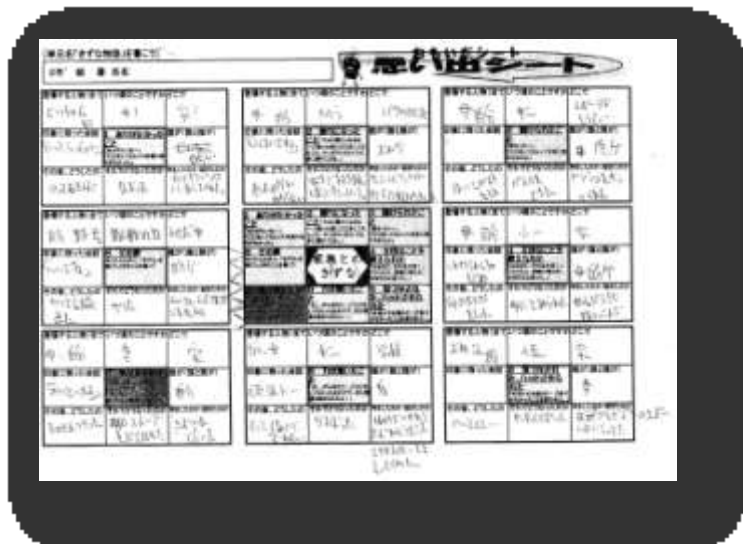
単元構想表		第2学年「C 読むこと」		単元名「きずな物語」を書く[7時間単元]	
言語活動例		ア 読歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。			
指導事項	留意点	学習活動	評価規準	留意点	他
ア	登場人物「お父さん」の描写から人物をつかみ、「きずな物語」を創作すること。	【練習教材】「樫太郎の人物をつかむ」という課題を持ちながら、「樫太郎」(教師作成)を読む。			2
		登場人物である「お父さん」の人物をつかむという課題を持ちながら、「盆土産」(事前)新出漢字や難語の意味を調べる。			3
イ	文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。【文章の解釈】	【練習教材】「樫太郎」(教師作成)の言動、描写(行動描写・心情描写・会話文等)から、樫太郎の人物をつかみ、内容を理解する。	登場人物の言動、描写から登場人物の具体的ないくつかの人物と文章全体を通しての「勇敢な」人物をとらえて読むことができる。	生徒が内容や登場人物の人物をよく知っている「樫太郎」に、教師が描写を加えたことで読みやすく、次の教材へ焦点を絞って取り組ませられる。	2
		登場人物の言動、描写(行動描写・心情描写・会話文等)から、「お父さん」の人物・心情をつかみ、内容を理解する。	登場人物の言動、描写から登場人物の「子どもを思う愛情溢れる父」「不器用な父」の両面をとらえて読むことができる。	生徒が2作品から取り読む作品を選んで取り組ませることで意欲的に取り組ませる。	4
ウ	文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。【自分の考えの形成】	内容の理解を深めるために、下書きの「きずな物語」をグループで読み合い、自身が書いた「お父さん」の言動について交流する。	自分がとらえた「お父さん」の根拠を明確にして友だちと交流し、自分の考えを修正したり、まとめたりすることができる。	最初の交流は同作品でグルーピングし、推敲後の交流は、他作品の生徒を入れて交流することで、自分の読みを深めさせる。	5 6
		自分と友だちが書いた「きずな物語」を読み、改めて自身の体験と関連付けて、「きずな」についての自分の考えをもつ。	はじめに考えた「きずな」と、単元の学習を続けて考えた「きずな」を比較し、新たに自分の考えをもつことができる。	1枚ポートフォリオを使い、学習の過程を振り返らせたり、生徒自身の「きずな」に対する考えを比較させたりさせる。	7
エ	多様な方法で選んだ本や文章などから適切な情報を得て、自分の考えをまとめること。【読書と情報活用】	教師のエピソードを聞き、「思い出シート(おもいだしーと)」を使って、自身の家族とのきずなを思い出す。		自身の「きずな物語」を書く際の材料のもとになることを伝え、必要性を感じさせる。 生徒の家庭環境の配慮し、親だけでなく、祖父母も含んだり、記入の無理強いをしないようにしたりする。	1
		抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同義異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を聞き語彙を豊かにすること。	登場人物の描写から「人物ことば集」の中から「ぴったりとあう語彙」を選ぶことができる。	他作品や辞書などから「人物をあらわすことば」を集め、それを使うことで、意欲的に取り組ませる。	2
国語への関心・意欲・態度に関する評価		自分の体験をもとにした「きずな物語」を書くことに関心をもち、進んで登場人物の人物や心情を描写がつかうようとしている。		自分の体験をもとにした「きずな物語」を書くことに関心をもち、進んで登場人物の人物や心情を描写がつかうようとしている。	

※「留意点 他」の記号… 指 指導に当たっての留意点、評 評価に当たっての留意点、教 教材・教具の工夫

(2) 自分の体験を思い出す。

物語「盆土産」(三浦哲郎)・随筆「字のないはがき」(向田邦子)に共通しているテーマ「家族のきずな」について、「思い出シート(おもいだしーと)」を使って、項目ごとに思い出させる。

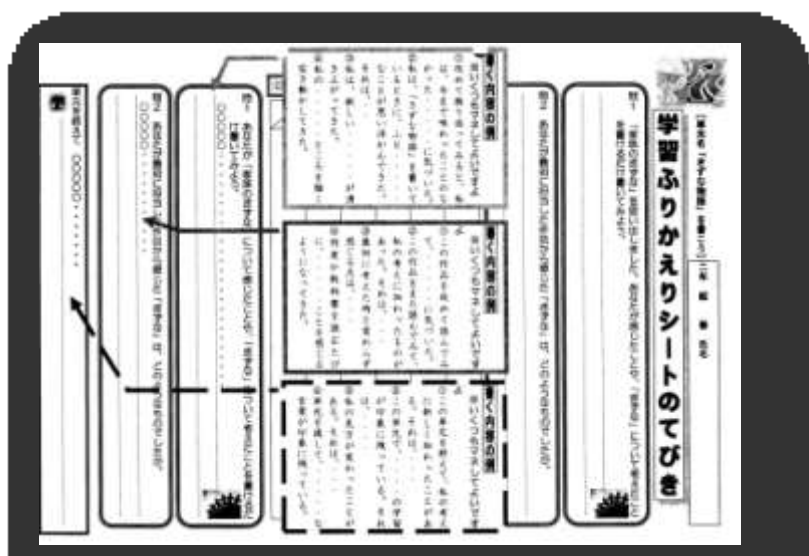
※このシートの内容が、創作をする際の種になる。



(3) 1枚ポートフォリオ形式の「学習ふりかえりシート」での変容の自覚

生徒が「思い出シート」で思い出した自分の体験をもとに、作品の登場人物「お父さん」を登場させて、創作した。

その毎時間の最後に、右の「学習ふりかえりシート」に学習内容と感想を書かせた。また、学習の前後で、同じ内容「きずな」についての質問をしたことから、生徒は、自分の家族とのきずなを考えながら、重ねながら学習をし、深めていたことが自覚できる。



右の生徒は、

- ① 「家族のきずな」について→ふだん「あたりまえ」に思っていることや、してもらっていることは、家族のさりげない優しさに助けられてできていることだと気付いた。
- ② 「作品からわかるきずな」について→この作品は、「父と子だけの親子のきずな」と考えていたが、「家族」だと思った。
- ③ 「単元を終えて」について→「家族のさりげない優しさに感謝し、生活していきたい。」と学習後に変容が見られた。

4 取組の成果

「家族とのきずな」について、自分の体験や経験を、創作「きずな物語」の種とすることができた。生徒は自分の体験や経験を用いることで、意欲的に取り組めた。また、あくまで「物語（フィクション）」を書く点、「お父さん役」として登場させる点を強調して提示したため抵抗なく取り組めた。学習後、「きずな」に対しても、自分の考えをもつことができた。